

日本語教育を支援する「サポーター」の現状と課題

大石 寧子

OISHI, Yasuko

徳島大学国際センター

要旨： 国際センター(旧留学生センター)の日本語教育が来年度で10年目を迎える。当初より日本語教育のいろいろな場面において日本人との学びあいを取り込んで展開を図ってきた。10年目を前にそれらについて検証し、より良い形での今後の継続・発展を図りたい。

キーワード：日本語教育、地域・学生サポーター、社会型日本語教育、道具としての日本語

1. はじめに

平成14年に留学生センター(現国際センター、以下センターとする)が設置され、翌平成15年4月から実際の業務が開始され、来年度で10年目を迎える。この間センターは徳島大学の日本語教育すべてを運営し、現在では①約6か月の集中講習型の日本語研修コース②週2コマのレベル別の全学日本語コース③全学共通教育センターの日本語・日本事情及び日本人学生・地域・留学生対象の共創型コース④総合科学部の日本語教員養成にかかわる科目⑤地域対象の公開講座等年間40前後のコースが開講される。その日本語教育の現場では、地域・日本人学生がいろいろな形で留学生に関わっていて、本センターでは「サポーター」と呼ばれている。サポーターの当初の方針から現状までを振り返り、次へと効果的な形で発展・継続をさせたい。

2. 「学校型日本語教育」と「社会型日本語教育」

大学における日本語教育の役割は、日本での授業や研究をはじめとする大学生活を順調に乗り切り、またそこに関わる学内外でのコミュニケーションをスムーズに行うために必要なものであることは自明である。本学では、日本語は留学生活を乗り切るための最優先な道具と考え、その道具としての日本語が駆使できるように知識の習得にとどまらず四技能の運用を身に付けさせることをすべてのコースの方針とした。

またセンター設置当初、本学をはじめ県内では国際化へ具体的に動き始めた時で、センターの業務の中に「日本人学生の派遣の充実」及び「地域への国際化」が盛り込まれていた。日本人学生・地域を日本語の授業に絡めることによって生まれる効果を検討した。

日本語教育界で「地域の日本語教育」という

分野が生まれ、それに伴ってボランティアによる日本語教師の存在が見え始めた頃、「学校型日本語教育(以下学校型とする)」と「社会型日本語教育(以下、社会型とする)」という分け方が石井(1995)によって言われた。石井は、教師と学生の領域が明確に区分されている学校型に比して、「社会型」は、教師と学生という枠にとらわれず、地域社会で共に生活し、限られた期間ではなく生涯学習的視点が必要になってくると指摘している。その中で「日本語を母語として習得した者が日本語をどのように運用すれば非母語話者にとって理解しやすく、円滑なコミュニケーションができるかという、日本語母語話者の非母語話者に対する日本語運用、日本人の異文化コミュニケーション能力向上の問題にも日本語教育が関わっていくべき状況に来ている」とあり、言われてから長い時間が経っているが、2012年度日本語学会春季大会で「『社会型日本語教育』を担える人材とは」(品田他)のパネルセッションが組まれていたように今日の地域の日本語教育はこの指摘を根底に展開されていると考えられる。この社会型の発想は日本人学生と地域の国際化を担う一つであるセンターでは、日本人を日本語の授業に取り込むことで留学生・日本人双方に効果が予測された。留学生にとっては生きた日本語に触れられ、またコース終了後も日本人との継続的な関係が望めると思われた。日本人学生・地域にとっては、日本語授業を通して、異文化に触れ外に目を向けるきっかけを得ると考えた。これらを期待し、日本語授業を支援する「サポーター制度」をセンターに取り込むこととした。

3. サポーター制度

サポーター制度は、本学の日本人学生からなる「学生サポーター」と地域住民からなる「地域サポーター」があり、単独でそのクラスを支

援することもあれば合同の場合もある。

3.1. 登録のシステム

地域サポーターも学生サポーターも自発的な申し込みで成り立っている。

学生サポーターの応募は、新年度に学内での説明会や友人からの情報やセンターが主催する催し物の参加等がきっかけになっている。

地域サポーターのほとんどは、センターの催し物がきっかけとなっていて、他には友人の紹介や恒常的に掲示している募集チラシを見ての申し込みが多い。

このサポーター制度には、登録料やしぼりはなく、参加できるときに参加すればよく、義務やノルマはない。ただし学生サポーターに関しては、毎年卒業する者が出るので、毎年度末、次年度に向けて継続の意思確認を行っている。地域サポーターは、今年度はじめてメールやFAXが届かなくなった登録者の整理・整備を行った。現在、学生サポーター51名、地域サポーター48名が登録している。

3.2. サポーターのクラス参加手続き

センター教員1名が窓口となり、サポーターと各クラス担当教員をつなぐ。日本語の各クラスでいろいろな形でサポーターが必要となった時に、内容・募集人数・学生サポーターか地域サポーターかまた両方か、やその他の条件と共に窓口の教員へ連絡する。これをもとに登録のサポーターに一斉メールをする。地域サポーターで、パソコンを所持していない場合があるので、その場合はFAXも併用する。サポーターは自分の都合に合わせて、返事を返すが、時期によっては、募集人数が集まらず、窓口教員・担当教員がともに人集めをせざる負えない場合もある。

4. サポーターの支援内容

サポーターは、日本語のクラスをはじめ、国際交流サロン、サマースクールなどで様々な支援を行っており、その概要は次のようである。

4.1. 日本語授業

サポーターの支援は、クラスによってさまざまである。大きく分けると「学校型」の一部を支援する場合と「社会型」を色濃く帯びて支援する場合がある。

初級のクラスでは、より早い運用力の習得を意識し、本学では教室の中での学習というより、教室は既に社会の一つという意識で留学生に臨んでもらう。そのために教員だけのクラスではなく、折に触れサポーターの導入を図る。導入はいろいろな目的でなされる。例えば新しい文型を扱う場合、その文型の概念や機能も理解

でき運用への手がかりもつかめたが、動詞の変換が学生によっては不十分と感じても、クラスワークのため変換練習だけにあまり時間が割けない。教員が、もう少し時間を割いたほうが各人、運用時にスムーズな変換ができ伝わりやすいと判断した場合、変換練習にサポーターの支援を仰ぐ。サポーターは、クラスへの参加前に担当教員からやり方の説明を受け、練習時の資料をもらい、サポーターと学生が1対1またはサポーター1に対して学生2ぐらいでクラスの最後などの20~30分に、ひたすら変換練習をする。学生は自分のペースで心置きなくそれに邁進でき、運用時に変換に手間取ることなく変換ができ、運用が助けられる。

そしてその練習をするために当然サポーターと学生はやり取りをかわし、進めていく。それはシナリオのあるものではなく、学生にとっては既習文型・語彙を自力で組み立てて、練習を達成するためになんとか乗り切ろうとする。またサポーターは伝えるために母語話者として当たり前に使っていた語彙や表現を相手に合わせて、どのように運用したら伝わるかを絶えず考えざるを得ない。また学生はその作業を通し、授業の中で触れた日本式のあいづちやしぐさ等も実感ができ、サポーターにとっては当たり前と思ってきた習慣やマナーなどが学生の反応や発言によって異なることを知る。教室で教師と学生として得るものよりはるかに大きなものが得られる。

内容的には、①動詞や形容詞の変換練習や動詞の各文型への変換練習②会話の相手③スピーチ練習④ひらがなやカタカナの定着練習⑤既習文型を使つてのタスクなど様々である。支援内容は、学校型が多いがそこで取り交わされる会話は、実際のものであり、初級のクラスにおいては、教室が社会の一部分と実感できる貴重な時間でもある。

一方、全学日本語コースの中上級者や全学共通教育センターの「日本語1~8」や「日本事情I~IV」の学部留学生を対象とした単位の出るクラスの場合はサポーターとの関わり方が初級とは異なる。留学生にとっては日本人の考え方や徳島事情等を深い内容まで直に得られる。「日本語・日本事情」のクラスでは、しばしば発表に向かって、調査が必要になるが、サポーターは、一日本人として調査対象になったり、調査方法・内容や手順などにアドバイスやコメントを出す。またこの間のやり取りにおいて、サポーターが地域サポーターの時には年長者になるので、留学生は通常の学生言葉ではなく丁寧語や時には敬語を駆使することもある。

また調査内容から波及して、お互いの国の文化・習慣、考え方などの違いについていろいろな世代と直接対話できることも留学生のみならず、サポーターにとって意味がある

最終週の発表会に参加し評価にも加わることもある。今年度の日本語クラスの支援内容は、年報を参照されたい。

4.2. 「国際交流サロンー日本語でしゃべらんで(話そう)」

サポーターの中で、センターが大学開放実践センターで数年に渡り実施した公開講座「国際交流入門ー徳島に住む外国人を支援するとは」の修了者3名が中心となってボランティアグループJSSを作り、センターと共催で2006年(平成18年)度より「国際交流サロンー日本語でしゃべらんで」を実施している。2006年度以前は、センターの主催で「日本語で話そう」を実施していて、日本人と留学生が自由に話すチャット・ルーム的であったが2006年度よりJSSの要望もあり、日本・徳島の文化や伝統行事を手段として留学生と日本人が共に学ぶ協働型を目指す現在の形になった。年間の内容検討や事前準備、チラシ作成、申込窓口、当日運営、終了後のアンケート集計をセンター担当教員と話し合いながら実施している。1年の実施内容と参加人数は、年報を参照されたい。

4.3. フィールド・トリップ

日本語の授業の一環としてしばしばフィールド・トリップや屋外学習が実施される。サポーターと留学生がペアになって、講義や説明を受け、見学・体験をし、課題を遂行するため終日行動を共にする。今期は2回行われた。

- ① タイトル:「吉野川を通して徳島を知る」
実施日: 11月10日
行先: 霊山寺、第十堰、脇町
参加人数: 23名(留学生13名、学生サポーター6名、地域サポーター3名、教員1名)
- ② タイトル:「徳島の今と昔を知る」
実施日: 12月1日
行先: 上勝町、藍の館
参加人数: 40名(留学生、24名、学生サポーター4名、地域サポーター7名、教員2名)

②に関しては、留学生、学生・地域サポーターからレポートを集め、レポート集を作成した。巻末の部分抜粋版を参照されたい。

4.4. サマースクール

今年度センターは、サマースクール「徳島で

会おう」をはじめて実施した。協定校を軸として学部留学生を対象に徳島大学の認知と本学への進学を意識し、「徳島・徳島大学と徳島の人を知る、徳島で自分を知る、友に会う」を目標とした。全プログラムの中で、講義やワークショップに関してはセンター教員が行ったが、それ以外の部分では、目標が達成できるように、また日本人学生への刺激、地域への異文化理解へのきっかけを考慮し、可能な限りサポーターによる運営や支援を仰いだ。その内容は以下のようである。

1) キャンパスツアー

サマースクール参加者(以下参加者とする)50名を7グループに分け、参加者5~10名に学生サポーター2~3名とでグループを作る。学生サポーターは、7グループが見学先でぶつからないようにキャンパスのまわり方や配慮をそれぞれのグループで考え、当日の役割分担も自分たちで考えた。

2) 研究室訪問

参加学生の学科を考慮し、関連科目で特徴のある研究室訪問を行った。研究室は、総合科学部2研究室、工学部3研究室、歯学部1研究室、医学部1研究室で、各研究室はPPTを使っただけの説明や同国の院生が補助をしたり、実験を体験させたりと具体的にその研究室が扱っている研究テーマについて説明があった。キャンパスツアーに引き続いて行われたので、学生サポーターが研究室までの同行や終了後控室までの誘導を行った。

3) 授業体験「留学生による日本・徳島紹介」

徳島大学の留学生に対する授業を体験させたいと考え、調査型の日本事情Ⅰの発表をあてた。日本事情Ⅰのクラスは前期開講時からサマースクールを見据えて、調査テーマを「日本・徳島を知る」とし、留学生たちはグループになり、テーマを選び、調査し、発表した。発表内容は、①四国八十八カ所②吉野川と川遊びー自然を体験しましょう③とくしまとマチ☆アソビアニメ④みんなで楽しもう!B級グルメ⑤日本と外国の違い⑥徳島の世界展望ー徳島を売り出す⑦日本の祭りである。発表を聞くに際し、サマースクールの参加条件に日本語既習が条件としてなかったため、日本語未習者、初級者、中上級者とさまざまなレベルが混在していたので、参加者を7~8名のグループに分け、英語または中国語の在校留学生を通訳留学生とし

て配置し、その補佐として地域・学生サポーターを配置した。また発表者も出身国のテーマについて。通訳留学生には事前に各発表の概要を渡し、ポイントを押さえながら通訳をしてもらった。

4) 多文化交流会

初日の夜に学生サポーターが企画・運営する「多文化交流会」を実施した。会場や食事等大枠や予算に絡むものは教員や事務方で進めたが、内容や進行に関しては学生サポーターが中心になって担当教員と相談しながら準備を進めていった。デモンストレーションをしてくれる本学の空手部、ダンス部、阿波踊り連との数回にわたる交渉・準備をはじめ、当日の司会・進行・受付等を担った。

5) 日本文化体験

日本文化体験は「和楽器」と「茶道」で、「茶道」は、会場や茶菓の発注などに関しては教員と事務方が担当したが、当日の進行・運営・指導は地域サポーターが担当した。「国際交流サロン」で何年にもわたって経験があるのでノウハウも蓄積できていて、スムーズに行われた。

6) ホームステイ

サマースクール参加者 50 名中、43 名がホームステイを希望し、ホストファミリー探しは難問中の難問となった。従来授業の一環として実施している日本語研修コースでのホストファミリーや教員の人脈では足りず、地域サポーターはもとより地域サポーターそれぞれの人脈も借りて、支援を依頼した。基本的には 1 家庭 1 学生で進めていったが、ホストファミリーによっては 2 名受け入れの希望もあり、結局 37 家庭が受け入れを行った。

1) ~ 6) の他にサポーターは、センター関連のシンポジウム・日本語研修コースの修了式等センターが実施しているほとんどのものに参加、支援をしている。

5. これまででわかったことと現状

1) 初級のクラスでは、気長な対応や全体的にゆっくりしたペースの地域サポーターのほうが学生サポーターより支援がうまくいくことがこれまでの中で多々あった。一方日本語 1 ~ 8 のクラスでの調査や発表に対してのコメント・アイデア・アドバイスなどについては、同じ立場ということで学生サポーターから面

白い意見の提供が見られる。また日本事情の調査内容については地域サポーターの知見がとても役に立っている。学生サポーター、地域サポーターの適材適所の導入を考慮することが必要と思われる。

2) 本学には多岐に渡った出身国の留学生がいるので、サポーターの興味・関心が集まる。そして知り合った後は、その関係が長く続く場合が多い。

3) 学生サポーターとして参加しているうちに留学生の友達ができ、海外に目を向け、留学のきっかけとなった学生が少しずつ出てきた。しかし今後の課題も見られる。

4) 「社会型」のニュアンスを授業に取り込みたいと普通の日本人を求めてサポーター制度ができたが、熱心に長く支援してきた地域サポーターの中には教えたい気持ちが募り、「教える」人が見られるようになってきた。

5) 学生サポーターは、自身の授業があるので、日本語授業の支援が難しく、週末開催の国際交流サロン等の参加になりがちで、学生同士の意見や対話を設定するのが難しい。

6) 国際交流サロンは、4.2 で記載したように協働を目指し、日本人が留学生の世話をしたり楽しませたりが目的ではなく、共に学ぶという考え方であるが、サポーターによっては、それが難しい。

7) 参加できる地域サポーターがだんだん固定化の傾向にある。

8) いろいろの世代の地域サポーターが望ましいが、若い世代の獲得が難しい。

9) 国際交流サロンやフィールド・トリップ、屋外講習について継続的な予算獲得が難しい。国際交流サロンについては現状では、大学の予算がつけられないので、各テーマの講師にはボランティアでお願いし、維持費はいろいろな形で教員が集めているが、材料などまだまだサポーターに依存している部分も多い。

6. 課題への対応

徳島はエリアとしては小さいが、この小ささがサポーターとセンター教員が直にすぐ相談・依頼・問題などを話すことができ、いい結

果を生んでいると思われる。留学生との関係も同様に密接になりやすく、留学生とサポーターの関係が1回で終わらず長く続く場合が多い。サポーターと国際センターは、これまで良好な関係を保ってきているが、ここまで来る間に課題も見え始めてきた。来年度はその原因や問題を分析し、よい方向へ持っていくためにまずサポーターの声を収集したい。また善意と熱意と団結でここまで進んできたが、それだけでは乗り切れない部分や少しずつ増えてきた部分を見直し、さらに一歩前進するために、知識の補給が必要な時期ではないだろうか。異文化理解とは、日本語教育とは、ボランティアとは、対話とはなどもう一度初心に戻り、いろいろなテーマでのワークショップや研究会など実施し、サポーターそれぞれの気づきのきっかけを作りたい。

参考文献

- 石井恵理子(1997)「国内の日本語教育の動向と今後の課題」『日本語教育』94号
- 西口光一(1999)「状況的学習論と新しい日本語教育の実践」『日本語教育』100号
- 朴鐘祐・水野マリ子(2008)。「国際的教育戦略における地域連携の位置づけ：神戸大学夏期日本語文化研修プログラムを中心に」神戸大学留学生センター紀要14号
- 品田潤子他(2012)『「社会型日本語教育」を担える人材とは－教師教育の視点から』日本語教育学会春季大会予稿集

参考資料：

フィールド・トリップ「徳島の今と昔を知る」
—「レポート集」より部分抜粋

「徳島を味わう旅行」

留学生(中国・吉林大学交換留学生)

帰り道でも気づいたことがありました。かえりは、まず北島でバスはとまりました。そこで降りた人たちの中には日本人は一人しかいませんでした。そして、降りてから、みんなは寮の中に入っていったのですが、その日本人だけはそのまま立ち止まって私たちが遠くまで行くのを見送ってくれました。この前温泉紹介のビデオを見たときもそうでしたが、最後まで見送るのを何回も強調しました。やはり日本では見送るというのが大切なようです。礼儀正しいことの表れだけでなく、自分の気持ちをきちんと相手に伝えたいからでしょう。

本当に充実した一日でした。藍染めのハンカチを大切にしたいと思います。

「上勝研修旅行に行って」

学生サポーター(総合科学部3年生)

「おはようございました」。朝、バスに乗るとサムさんがそう挨拶してくれました。なぜそう言ったのかを聞くと、「昨日の朝、会わなかった人だから」とのことでした。サムさんの母語では、前日に会わなかった人への朝の挨拶と、前日も会った人への朝の挨拶が違うそうです。また、ウガンダと日本の木が違う理由を聞かれ「気候が違うからだと思いますけど」と答えたときには、「すみません、“けど”のあとには何がありますか」と再び質問を受けました。わたしたちは普段何気なく「～と思うけど」と言いますが、考えてみれば“けど”は接続詞なので、前後に文がくるはずで、この“けど”については、答えるのが難しかったので先生の力を借りて「～と思いますけど(、よくわかりません)」という意味だと説明しました。このとき、日本語がよく文を省略する言語であることを実感しました。

「教科書にない日本語教育の場を通して」

地域サポーター

そして、私が今回一番感じたのは留学生との心の距離の近さである。最初に行ったゼロ・ウエイストアカデミーのリユースのくる

くるショップにて、母国に居る生まれたばかりの姪に着せてあげたいと肌着をもらって帰る人や自分の子供に着せる服を探している人を見て、離れていてもこうして家族を想う姿、母国の事を思い出さず姿というのは全世界共通であり、教室ではなかなか見ることの出来ない一面を見えたことでとても親近感が湧いた。そして、棚田を見に行く時に皆で同じ風景を見ることが出来たのも貴重な体験だった。高いところまで登る道中にあった“もみじ”を見て皆で「きれいだね～！」と言い合え、道中でもそれぞれの国の話をしながら登るといのは楽しく、とても有意義な時間だった。



日本語の授業で



フィールド・トリップ



サマースクール「授業体験」



国際交流サロン「華道を楽しもう」